

校名：鳥取大学附属中学校

所在地：〒680-0945 鳥取市湖山町南四丁目 101 番地 電話番号：0857-31-5175

記載日：28年5月25日 記載者：中尾ゆみ子・齋藤隆彦 記載者役職：副校長・研究主任

貴校の校風、おおまかな特色について：

鳥取藩の藩校「尚徳館」の流れを汲み、「文武併進」「切磋琢磨」を校訓としている。明るい前向きなエネルギーを持ち、個性的な分野で力を発揮する生徒が多く、「自由」と「自立」と「連帯」の気風をもち、学校の校風も同様である。

昭和 60 年に現在の土地に移転し、鳥取大学の敷地内に小学校と中学校が隣り合っている。従って、生徒は大学構内を通過して登下校し、学問を身近に感じることができるのも一つの特色である。県の東部に位置するが、通学区域は鳥取県中部から隣接する兵庫県北西部に及ぶ。附属小学校からの入学生と広域の公立小学校からの入学生が、それぞれの地域の個性を持ち寄りながらも互いを認めあって生活している。従って友だちの良さや活躍を互いに喜び合う気風も持ち合わせている。

文化活動や体育活動に力を発揮する生徒が多く、スピーチ・作文・科学研究での優れた発表が見られる。また部活動の活躍もめざましく、文化部、運動部ともに毎年全国大会に出場するチームもあり、学校の活力につながっている。その他公立学校の部活動チームとの練習試合等での交流や試合・発表会でも地域の学校と切磋琢磨する姿も見られる。

貴校の卒業生の活躍状況について：

- ① 追跡調査をしていない。
- ② 進学した高等学校を卒業後の進路まで把握。その後の就職については若干名。（情報は学校）
- ③ 特に県内の高校については中高連絡会等で卒業生の進学状況等の把握ができる。しかし、その後については、卒業後も教員と連絡を取っている生徒からの限られた情報が入るのみ。学校に記録を残すことがないため、職員の転出に伴って、掌握できる者がいないのが現状。ただ、卒業後の組織としては「同窓会」「附属会」という二つの組織があり、毎年総会がもたれているため、継続して出席している会員は把握できる。長い年月にわたって、卒業生は、地域を支える人材として活躍している。

貴校勤務経験者の先生方が公立学校・教育委員会などへ戻られた後の活躍状況について：

- ① 追跡調査をしていない。
- ② 公立学校に戻られた後の異動については、県教育委員会のホームページ、新聞報道等で確認でき、活躍については、公立校との交流場面で情報を得ることができる。
- ③ 状況については、教育委員会への異動、公立学校の管理職、エキスパート教員として多くの授業公開、また各校の教科指導・特別活動・部活動等、教育を推進していく人材として活躍しておられる。

魅力のある、特色のある、または、今後、公立学校へも展開できそうな先導的な取り組みなどについて：

【魅力としての気風】

本校の魅力として、本校の「気風」を挙げる。多くの生徒たちが「伸びよう」としている。だからこそ、「積極的に行動しよう」とする。そのため、授業や行事の一つ一つを大切にする。だからこそ、成長していく。よく生徒たちと使う言葉に「値切らない」というものがある。多くの生徒たちは「値切らない」で3年間を過ごし、その中で成長するという成長のイメージを持つ。

目の前の取り組み（例えば、運動会の大縄跳び）を値切らずに取り組む。そこでは高い目標を立て、知恵を出し合い、試し、失敗し、また相談し、再挑戦する、そういう取り組みをする。そこで経験が次の取り組みに活かされる。この連続の中で生徒は成長するのである。そこには、「自分（たち）で考え、行動し、それらの行動を認め合い、協力し合う」という「適度な自由」と「自立」と「連帯」の気風がある。個々の行事や授業のスタイルを魅力として述べる以前に、このような気風こそが本校の核であり、他校、他の公立校へ広がればよい魅力であると考えます。

【気風をつくるもの】

先に述べたように、「気風」は一つの「魅力ある、特色ある、先導的な取り組み」でつくられるわけではなく、連続した授業や行事の一つ一つ、あるいは、掃除や学活、部活動などの営みの連続によってつくられる。

例えば、生徒一人ひとりが協力と努力と創意工夫を必要とする種目（大縄とび、2人3脚的競技など）で構成される運動会、合唱をクラスや学年で作りに上げる文化祭。また、それらの行事までに、春の遠足や学年集会などでも、大縄跳びなどが取り入れられる。年間を通して協力と努力と創意工夫の力を出し合うことが必要であり、そこで「値切らない」で取り組むことが充実感を生み楽しいものだとして生徒に意識づけられる。授業においても、「難問」が与えられ（あるいは生徒同士が出し合い：例えば、「数学道場」という取り組みでは廊下のホワイトボードに生徒が「難問」を出し合い、解き合う）、それらに生徒が挑戦する授業。あるいは、プレゼンをおこない、作品を提示し合い「自分の作品」を出し合う授業などが日常的に連続的に行われている。

「気風」をつくっていく、そのような行事や授業、日常の営みの連続性が魅力だとも言えよう。

【失敗を恐れない、挑戦できる環境】

それらの授業、行事などの連続によって、失敗を恐れない、友だちの失敗を許容する意識は前景化される。なにしろ、運動会にしろ、授業での問いにしろ、「難問」である。失敗を重ねないと成功にいたらない。協力しないと成功しない。つまり、日々、「挑戦」が求められ、そのために、協力もし、恐る恐る自分のアイデアも出し、友だちのアイデアも認める活動が続く。そのうちに、「挑戦」に慣れる。つまり、「まず、失敗してみる」「友だちの失敗をバカにしない」といった作法に慣れるのである。

【「気風」をつくるための小さな取り組み 「四つの約束」】

「失敗を許容する」ために、小さな合い言葉も「気風」をつくるのに役立つ。「4つの約束」と呼んでいる。それは「ひそひそ話をしない」「クスクス笑いをしない」「人のマイナスを言わない」「先生や友だちの言葉を自分に向けてだと思って聞く」である。「難しいことができるようになるには、失敗を重ねなければならない」とはよく聞く言葉であるが、そのためには「失敗」を許容する気風が不可欠である。しかし、多くの生徒たちは小学校時代に「失敗したらダメ」という意識を持ち、「仲良しグループ」の問題など、友だち関係の難しさも痛感している。そのため、この「4つの約束」は「伸びよう」と決意して入学した生徒たちに新鮮であり、守るべき福音として響く。

【「失敗」を恐れない「気風」がつくる「挑戦」 例え「知の冒険」】

「失敗」を恐れないことは「挑戦」を支える。「未知」のもの、「難問」へ向かうことを支える。本校の取り組みの一つに「知の冒険」がある。キャリア教育の一環として、2年生の「総合的な学習」での取り組みである。鳥取大学の先生方の特別授業をいくつか聞いてもらい、それを選択して受講するというものである。この取り組みを生徒たちは大きな抵抗なく喜びとして受ける。それは、「よくわからないこと」とつきあう作法が身につけているからである。「よくわからないこと」と出会う時「すぐに正解を教えて」「わかりやすく解説して」とは思わず、「この時点で何が分からないか」「でも、少しぐらい分かることはないか」と考え、あるいは、「世の中にはわからないことがまだまだたくさんある」という広がりを楽しむことができる。このような態度は、日々、失敗を恐れず難しいことに挑戦し、失敗を許容する気風を形成しているからこそ、できる、構えである。過去5年間において、述べ171人の鳥取大学の先生方に、157講座を開設していただき、742名の生徒たちが受講した。

近年は、東京への修学旅行の機会を「知の冒険」と位置づけ、東京大学での特別授業も受講している。ここでも、自分で考え、よくわからないことを受け止めることができるからこそ、楽しむことが出来ているようである。今年度授業して下さった東京大学大学院教育学研究科の先生は、「高校生や中学生に特別授業をすることがけっこうありますが、鳥大附中の生徒ほど、問いに対して考え、それを発表し友だちと共有しようとする生徒はいませんでした」と感想を述べられた。

【個性が出せる、個性が伸ばせる学校】

卒業生たちが例年、本校への感想として述べるのは、「友だちに恵まれた」ということである。「それぞれの個性が楽しい」「凸凹感がいい」などと言う。それは、ここまで述べたように、それぞれの生徒が「やれること」を失敗をおそれずやる気風を作り上げているために、「友だちのプレゼンにおどろいた」「運動会でのリーダーシップすごかった」「美術の作品、感動した」など、生徒同士で刺激を与え合い、その刺激でさらに伸びる、といった経験ができているためである。それはもちろん、日々の授業でも、あるいは掃除や給食の準備片付けなどでも同様に見られる。つまり、生徒それぞれが「こうしたらよいかも」「これならできる」を出し合える関係となっているからである。

【地域の人材の活用；PTAの協力】1年生のキャリア教育の一環として行っている学習に「キャリアメッセージ」がある。これはPTAに呼びかけ、地域で活躍しておられる職業人を発掘し、生徒への講演を依頼してもらうというものである。例年十数人の講師においていただき、生徒が講座の選択受講をするものである。広域にわたる校区の保護者であるため、また保護者自身も本校の卒業生であることも多く、非常に協力的でさまざまな職種の講師を探していただくことができる。以下列挙してみると、医師、新聞記者、アナウンサー、造園家、礼法指導講師、ツアーコンダクター、看護師、交通機動隊員、鉄道会社、美容師、スポーツインストラクター、畜産業、調理師、家具職人、教師、弁護士、IT関連企業、グラフィックデザイナー、体育指導員（オリンピック選手）、自然公園管理などあらゆる職業から見た世界観、職業意識に触れ、中学生としての今を考えるきっかけとなっている。過去5年間を振り返ると、73名の職業人においていただき、70講座でのご講話をいただいたことになる。また学習の当日は講座の進行は生徒が行うが、講座運営の補助もPTA活動の一つとして行っている。さらに嬉しいことは、講師の中には本校の卒業生が、少なからずおられることである。講師の方もまた母校での講演を喜びに感じてくださることである。そして、これらの方々は、この地域の人材として活躍されていることは言うまでもない。本校の地域への貢献ということができるであろう。

以上、本校の魅力をその「気風」に求め、またその「気風」を作り出す行事や授業、日常の営みの連続性に求めた。それらの循環によって、生徒も教師もPTAも入れ替わり続けるが、失敗を許容し、挑戦し、値切らず、連帯してことにあたり、その営みで成長する学校という場が作り続けられている。このことが本校の魅力であり、他校にも広げたいものである。

地域において、現在、貴校はどのような存在であると考えますか：

学校長以外の教員は全て公立学校との人事交流によって赴任した職員である。従って公立学校に戻ることを前提の数年間を本校で勤務されることとなる。本校のある鳥取市には本校を含め18校の中学校がある。決して多くはない学校数であるので、さまざまな教育活動の中に本校の存在も定着している。例えば、教員は、市内の教員の研究組織の一員であり、共に県内の教育活動の推進に協力する関係にある。ただ、創立以来の歴史の中で、先導的な教育研究や実践について、公立学校の教員には、選抜された生徒だからできる研究や実践であるといった認識があり、本校の実践が参考にされることが少なかったのではないかと、附属学校として公立学校にもっとアピールできることはなかったかという思いもある。

一方、本校での経験は、長い教職経験の一部であるとはいえ、それぞれの教師の、その後の教育活動にプラスになっていると思われる。なぜなら、大学敷地内にある附属中学校という環境は大学の知的資源を活用できる環境にあり、教科教育の研究を深めることができる。また、附属中学校で成長したいと願うさまざまな力を持った生徒との学校生活では、生徒の工夫を引き出した実践がでる。これらの実践は教員自らの一つの自信となると考えるからだ。

現在、県教育委員会との連携を図り、地域の教育課題の解決をめざそうとしている。地域には公立の小中一貫校が3校開校したが、その他の多くは中学校区で子どもたちを育てようとしている。そんな中で、幼から小へ、小から中へのつなぎのカリキュラムを本校の実践によって示すことができるのではないかと考える。一人の子どもが、幼小中と劇的に成長していく過程でどのように学ぶことが大切なのか、鳥取大学附属幼稚園・小学校・中学校・特別支援学校の実践で地域の教育に貢献できると考えている。

附属学校の存在意義、貴校の存在意義について：

鳥取大学は、教員養成系の大学ではなくなり、開放養成の大学となったが、やはり教員志望の学生は少なくない。年間百数十名の教育実習生の受入をしている。しかし、県外の学生も多いので、実際に教壇に立つのは県外の学校という現状もある。そんな中、本校の事情により、昨年度から今年度にかけて、育児休暇の代員を県教育委員会に求めたが、配置されなかった。副校長は公立学校長会にも出席しているが、地域の公立学校も同様の現状があるようだ。このことは県教育委員会が把握している、教職を希望する若い世代が本県には少ないことを意味しているように思う。自分の県に先生がいない、これは遠い未来の不安ではなく、目の前に突きつけられた現実と言っても過言ではない。本県では、若い世代の教員養成について、たびたび話題となっている。

大学評価も厳しい現実があり、学科の再編等も進んでいる中で、教員養成が切り離されるのではないかと心配は大きい。本校での教育実習では、大学での教育実践の基礎の積み上げの他に本校でのオリエンテーション、学級・教科の指導を大切にしている。教員として教壇に立つために必要な教科教育以外の領域についてもできるだけ学んでほしいと願うからだ。鳥取県の教員志望の生徒が鳥取大学に進み、教職課程を履修し、本校で教育実習をし、鳥取県の教員となれる道が開かれていることを切に願う。やはり自分の県で次の世代の教育に関わる人材を養成すべきだと考える。附属学校の存続の必要性を強く願う。